

基肄城築造1350年

基肄城を知る

11

―鎌倉・室町時代の基肄城―



特別史跡基肄城跡は、日本の

国家形成を考える上で欠くことができない存在として、佐賀県で初めて特別史跡に指定されました。一方でこの基山は、古代の遺跡そのままを私たちに見せているのではなく、古代以前から現代までの人びとが手を加え、さらに自然の猛威の痕跡など様々な歴史の積み重なりを私たちに見せてくれています。

今回からは、その一つひとつの積み重なりの中から、主だったものを取り上げて記していきます。まず、手始めに古代山城として築造された基肄城のある山、基山が、再び「お城」として利用されることとなった時代について記してみます。

時は、鎌倉時代から室町時代、いわば武士の台頭によって始まる中世の出来事です。記録では、基肄城ではなく「木山城・城山

城」として伝えられています。

もつとも、記録に残されている時代は室町時代の初期、世を二分した南北朝のせめぎ合いの中、九州の南朝勢力を抑えるために遣わされた幕府の九州探題今川了俊が、南朝方の勢力圏内であつた太宰府を制圧した後、応安4(1371)年に城山(木山)に布陣したことを伝えています。さらに、今川氏の後に九州探題となる渋川氏、時の探題渋川教直による少貳氏一党の掃討作戦の際、周防の大内政弘に布陣して欲しいとの要請をおこなった城としても書状に残されています。その後、渋川氏と少貳氏の勢力争いの中で、しばしば木山城が登場してきます。

この木山城については、江戸時代の秋月藩士大倉種周が作成した『古戦古城之図』の中に「肥前國基肄郡城山古城之図」とし

て残されており、現在、特別史跡基肄城跡の中に室町時代に刻まれた「城」としての記憶をたどることができます。その一つが、基山の山頂にある、通称「いものがんぎ」と称される「畝状豎堀群」で、その時の姿を見ることができます。

平成24年度から始まった基肄城跡南水門調査では、基肄城築造時期に使われた食器が僅かに出土しています。それらの多くは鎌倉時代から室町時代の坏、皿、土鍋で、少数ですが中国から輸入された陶磁器や滑石製の石鍋も出土しています。これらは、同時代に南水門付近で、食事行為を行っていたことを表す物証といえるでしょう。

基肄城は、地域勢力が分立していた豪族社会から、律令制に基づく中央集権国家へ変貌しようとしていた古代初期の世にお

いて築造された城でした。世は移り、武士による地域勢力分立社会から、織田、豊臣、そして徳川による武家統一社会に至る戦乱の世の中で、再び城として利用されることとなったのです。

※問合せ先

教育学習課

ふるさと歴史係

電話92-2200



主郭と畝状豎堀群（通称 いものがんぎ）

（佐賀県『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第六輯 1938年より）